

宗教による自立の可能性

新宗教と宗教批判をめぐる

島園 進



はじめに

新宗教というと、いろいろな範囲の区切り方があり、人によっては戦後発展した宗教、それから後のものを新宗教と言うこともあります。私どもの場合は十九世紀の初め頃から現れてきたものを新宗教といっております。

一八〇〇年代の初めに如来教という宗教が生まれましたが、その頃から始まり、一八三〇年代にできました天理教、あるいは明治の終わり頃の大本教と、次第に大き

な教団も成立するようになります。小さい宗教もたくさんできましたが、そのうちのかなりのものが今も残っています。新しい宗教が次々出て消えないので、宗教の数が増えてくるということがあるわけです。これは日本の社会の一つの特徴でもあります。たくさん宗教があつて、民衆の側からいうと、いろんな宗教が選択肢の中に入っている。宗教の側からいうとお互いに競争している。切磋琢磨している、そういう状況があります。

日本について新宗教という言葉を用いておられますが、海外でもこのようにたくさん宗教団体が出てきて、お

互いに競い合っているというような状況がある地域があります。アメリカなどはかなりそうです。アメリカはもとよりヨーロッパで宗教的な迫害を受けた人が逃げて行って作ったような国でありまして、信教の自由を尊ぶ。しかもさまざまな国からさまざまな宗教を持った人が来たので、本当に多様な宗教があります。

たくさん宗教があると、人が選べるものだから、ますます人のいわばニーズに合った宗教が発展するということがあつて、自由競争によつて教団がますます増えてくる。それを上から抑えることができない。そうしますと大衆のニーズに応じて、リーダーもいわば下からどんどん出てくるようになってくる。大衆がリーダーになつて、そしてリーダーだけではなくて、実際に活動を行つていく人たちが大衆自身、一般の人たちが普通の生活をしてながら宗教活動をしていくことになってくる。それがまた現代の社会環境にふさわしいものでもある。一般の人と専門家の間が離れてしまつてゐるのではなくて、一般の人がそのまま信仰生活に積極的に取り組んでいる、そういうことになるわけです。

そういう新宗教の代表的なものとして創価学会もあるということ。創価学会は仏教の一派である日蓮正宗という教団の信徒団体でありましたから、仏陀以来の長い歴史をもつ古い宗教ともいえます。古い宗教である仏教がたまたま現代ではこういう形をとっていることと見るともできます。あるいは日蓮大聖人から始まつた宗教と捉えるとしても、日本史という尺度の中ではかなり長い歴史を持つていえるといえます。しかし牧口常三郎を創始者として創価学会の独特の思想ができたのは一九三〇年前後です。そして創価学会独特のものが、その宗教生活の中で相当に重要な位置を占めるので、やはり新しい新宗教ということになるわけです。

そこでそういう新宗教が出てきますと、社会の側では、これは何か新しい集団がわきおこつてきた。自分たちの今までの生活の仕方と違う考え方をもち、集団を作つて行動し始める。何となく危ないという感じを持ちますので、新しい宗教が起こつてくる時には必ずといっていいほど反対運動、あるいは批判活動も起こつてくるわけです。ですからいわば宗教紛争が新宗教の発展とともに

起こってくるのが少なくないわけです。

そこで今日はそういう宗教批判のことを頭に入れながら、現代日本の新宗教がもっている特徴を考えていこう。新宗教が宗教批判を受ける、それに対して新宗教の側ではどのように応答しているのだろうか、そのへんを考えていきたいと思っています。

一、宗教対民主主義

この問題を考えるのに、特に現代において、宗教が批判される、あるいは一般社会と宗教の間に軋轢が生じる場合の特徴を考えてみたい。その手がかりとして、まず世界的な情勢のもとで考えていくという試みをしようと思います。今の社会はアメリカや西欧を中心とする民主主義の政治社会体制のもとに世界が動いているわけですが、世界の諸国を見れば、それで一枚岩になっているわけではなく、その民主主義に対して、いわば抵抗している国もたくさんあります。その中には宗教を根拠にしてアメリカ的な民主主義では嫌だと、こういう人たちもたくさんいます。ですから宗教対民主主義という、そうい

う対立構図があるということです。

これは冷戦が終わりまして、こういう対立がかなりはつきり見えるようになってきたということがあります。

冷戦が終わるまでは自由主義か共産主義かというような対立が大きかったので、その後ろに本当はあったはずの宗教対民主主義という対立が見えにくかったのです。

しかしその冷戦が終わったのはごく数年前ですが、すでに一九八〇年頃からそういう動きが目立つようになってまいりました。イランが革命を起こした。革命を起こすという、今までは民主主義あるいは社会主義の方向へ、いずれにしろ宗教を軽んじたり、否定したりする方向へというのがフランス革命以来の流れでした。ところが、宗教側が革命を起こして、他の先進国を中心とする民主主義体制に宗教的な根拠によって対抗するというのがイラン革命ぐらいから起こるようになりました。

イランで革命が起こったのは七九年ですが、それ以来イスラム勢力と西洋の民主主義諸国、アメリカ、イギリス、フランスあたりを中心とする勢力と、イランとかイラクとか、そのあたりの関係が難しくなってきた。

世界で一番危険な対立の一つと見られるようになってきました。もちろんイスラエルはアメリカ側にいるわけでありまして、中東の対立というのは、ユダヤ教とイスラムの対立、あるいはキリスト教とイスラムの対立という面もあります。しかし、それ以上に、イスラム的な宗教勢力対民主主義勢力の対立と、そういうふうに見た方がいいと思います。

これは世界の対立であります、もうちょっと狭く、たとえばアメリカの国内を見ましても、ややそれに似た対立があります。たとえばこれは妊娠中絶をめぐる問題などを見てみるとわかります。アメリカ合衆国ではこれは大変大きな政治問題になっておりますが、妊娠中絶に反対する人たちは、多くの場合、宗教的な根拠に基づいて反対しております。つまり胎内にいる子供も人間の命なのであって、それをどんな理由があるにせよ、殺すということは宗教的な掟に反する。キリスト教ならば神の意思に背くことになる、聖書の教えに背くことになるということであります。

一九九四年九月に、国連人口開発会議というのがエジ

プトのカイロで開かれましたが、この妊娠中絶を認めるということが、人口の抑制にも通じるし、女性の権利を守ることに必要な、これは民主主義的な勢力からの主張であります。それに対して一番強固に反対したのはカトリック教会、バチカンであります。それとイスラム勢力とがここでは連帯しておりました。ですからキリスト教対イスラムというよりも、宗教勢力が連合して、宗教ではなくて、合理的な理由によつてものごとを判断して世界を運営していこうとする民主主義勢力と対立しているという、そういう図式がある。それがアメリカの中では国内の政治問題となっていることでもあります。

民主主義勢力はどういう価値を掲げているかという、自由、人権、あるいは政教分離であります。政教分離というのは政治に対して宗教が干渉しない。信教の自由を認める。多様な勢力が自由に宗教活動ができるようにする。また宗教を信じない自由というの也是十分に認めるということであります。それに対して宗教側では、そういうふうな自由、人権、政教分離を進めていくと、社会が宗教からどんどん離れていって、宗教が尊んできた

価値を壊していつてしまう。これまで多くの人が神様を信じながら、あるいは仏法なら仏法、聖なる教えを守りながら尊んできた良き秩序が壊されてしまう。そういうふうに感じている。

たとえばエジプトのカイロに住んでいるイスラム教徒たちは、アメリカからテレビが入ってきて、新しい思想が入ってきて、女性が権利を主張するというふうになると、自分たちが宗教と一緒に守ってきた安定した家族生活や良き人間関係が壊れてしまう、そういうふうに感じているということです。

さてそれでは日本ではどうかというと、日本でもこうした対立の影響が出始めていると思います。たとえば政教分離に対して、そんなに強く守る必要があるのかと、疑問を呈する人たちも出てきている。この政教分離というのはアメリカ軍に押しつけられた憲法によって、アメリカの憲法というのは最もラジカルに政教分離を規定しているわけですが、それを日本も鵜呑みにした。そのままでいなくてはいけなくてあるうか。たとえばイギリスを見れば、国王が位につく時には聖公会、すなわちイ

れです。ところが、この自由主義批判という面から見ると、問題はもっと大きな広がりをもつ。それは大嘗祭や靖国神社を問題にする神道的な国家主義的勢力、そういう人たちが言っているだけではなくて、新宗教の中にもそういう自由に対して疑問がある、こういうことを言う人たちが増えてきているように思います。

たとえば統一教会は、性の自由に対して非常に批判的です。統一教会では合同結婚式ということが教義の核心に関わる重要な行事です。神様の掟のもとで集団で行われる聖なる結婚式、それによって結ばれたカップル、これは正しいものであって、意義のあるものであるけれども、それ以外のカップルは問題がある。とりわけ婚前の性行動というのは非常に危険で間違っている。墮落しており神の意思に背くものだ、そういうことを強く言うわけです。こういう教えが若者に時に魅力的に感じられる。一般社会があまりに自由なので、どうやって自分の生活を律していいかわからない。そういう時にはつきりとそれはいけないんだと、宗教的に言われると、そういうものに対して魅力を感じる。宗教の方もそういうものに応

ギリス国教会の宗教行事として王様の即位式をやっている。

それに対して日本では天皇の即位になぜ神道のやり方に従い、国家行事としてはいけないのかというような主張が出てきております。これは社会の制度から宗教的なものを除いていつてしまうと、良い秩序がどんどん壊れていつてしまう。日本の場合は神道を中心とするコミュニティ秩序が長い伝統を持っている、これは本当かどうかわかりませんが（というのは大嘗祭は長い間中断してありましたし、むしろ仏教の方が有力だった時代が長かったから、いろいろな議論があるところですから）、大嘗祭の国家行事化を支持する人たちは、そういう根拠から宗教的な感受性を日本人が失つてしまうということと、そういう徹底した政教分離ということが関係があるんだと、そういうふうな立場をとっております。靖国神社の公式参拝などもこれと関係しています。

こういう意見は世界的に従来民主主義と結びついてきた反宗教的な、あるいは非宗教的な自由主義、そういうものに対して疑問を持っている、ということの一つの現

えようとしていいるということがあります。

オウム真理教という宗教が最近出てまいりましたが、この宗教も出家をするわけですが、そうすると一切性関係を断つ。今まで夫婦だった人たちも別々に暮らすというようなことをやっております。これは性の自由に対する批判です。

一方、言論の自由に対する批判というのも強くなってまいりました。たとえば幸福の科学という団体が、講談社を相手どりましてフライデー事件というのをきっかけにして裁判を起こしました。かなり目立つ抗議行動を起こしました。あれは、たまたま自分たちの教祖である大川隆法という指導者が誹謗中傷の記事を書かれたから、それに反対しているんだと、世間ではこういう捉え方がありますが、しかしその背後にこの宗教本来の思想があります。

つまり現代のマスコミは言論の自由を乱用している。とりわけ宗教に対して尊敬心を持たない、人が尊敬しているものをこきおろすということにエネルギーを注いでいる。そもそもマスコミには何かそういう性格がある。

人の嫉妬心に媚びる、偉いもの、人が尊敬しているものなら何でもひきずりおろすという、そういうところがあるのではないか。そういう態度が日本人の精神全体を蝕んでいる。もつと宗教の大事さが国民に伝わらなければならぬ。そのためには教育も変えていかなければならない。今の学校教育では一番大事なことが教えられていない。人に感謝する気持ちであるとか、命の大切さとか、が育てられていない。それは学校教育から宗教というものがはずされてしまっているからであるという考え方で

ではなぜ宗教がはずされているかというところ、これは政教分離、信教の自由を守るためである。公立学校で宗教教育をすると、子供に何らかの信念を教え込むおそれがあり、信教の自由を妨げる。それが脅かされる危険があるから宗教教育をしないのだということで、政教分離という制度のあり方に関わってきます。そうしますと幸福の科学的な立場からの自由主義批判というものが、現代日本の民主主義的制度の前提にまでふれてくる、そういう内容を持っているということがわかります。現在の日

何らかのルールに服従しなければ、本当の宗教性は身につかない。そういうふうに対抗方向を向いている、こういうところが目立つようになってきていると言えます。

二、宗教と民主主義の接点としての「自立」

しかしもちろんその宗教と民主主義というものが反対ばかりを向いているわけではなくて、接点といえましょうか、重なるものといえましょうか、お互い共有しているものもあるわけです。これは戦後の日本の社会ではそういうものがかなり当然のように思われていたわけです。ですから創価学会とか、その時代に発展をした宗教団体では、このことがわりと自然に受け入れられてきたのです。最近の宗教運動ではちょっとそれが違う。あるいはイスラム勢力でもちょっと違うということです。

創価学会の場合には宗教と民主主義が一致するはずだという、そういう前提があるわけです。これは牧口初代会長の思想をたどってみれば、まさにそういうことがよく分かります。近代の民主主義思想の代表ともいえる教育思想ですね。近代的教育思想の中から創価学会の思

本が受け入れているアメリカ、ないし西洋流の近代的な民主主義制度に対する見直しの要求ですね。そういうものが最近の宗教の中には出てきているということです。

これはある意味ではアメリカの独立とか、フランス革命以来の長い西洋中心の、全世界を民主主義社会に変えていこうという動きがちょっと方向を変えているということであって、西洋が相対化されてきたということと関わりがあります。宗教から世俗的な自由へ、非宗教的な自由へと方向がそれでもいいのかと問われる、そういう流れが出てきているということです。ですから宗教と民主主義社会の間の関係がたいへん難しくなっている、そこからさまざまな問題が出てくるようになってきた、そういうふうにも見るができます。

こう考えてくると、宗教と民主主義社会、宗教と人権とか自由というものが反対方向を向いている。宗教生活をするためには自由を抑制しなければならぬ。あるいは人権よりも神の教え、永遠の法、聖なるものを尊ばなければいけない。目上の人の権威を重んじなければいけない。どんな人も権利権利と主張してはいるのではなくて、

想が形づくられてきたということで、創価学会にとって当然宗教と民主主義は一致できるはずだという、そういう前提があると考えられます。これは二代目戸田会長の書かれたものの中にもそういう雰囲気がよく出てくるし、池田名誉会長の書いたものの中にもそういう思想がかなりはつきり出てきます。

これは創価学会の話で少し先走った感がありますが、では一般に宗教と民主主義の間の接点といえましょうか、共有できるものというと、どういうところにあるのでしょうか。これはいろいろな側面から考えていかなければならないけれども、一つ要になるのは自立ということとです。つまり宗教にとって自立ということがかなり大事であるし、民主主義社会にとっても自立ということが大事だということです。

自立というのは、現代の日本人にとってはかなり意味が分かり易くなっている言葉ですが、これを英語に直そうと思うと難しいですね。インディペンデンスという言葉があつて、これは独立と訳されますが、これはディペンデンスという、依存するというのがインがついて、

そうじゃないということ、依存しないということです。また「独」というのは一人という意味です。ですから一人で立つという、そういう言葉です。あるいはセルフリライアンスなんていう言葉もあるんですが、これは自分に頼るといいますか、そういうような言葉で自立ということをもっともいいのかもしれないけれども、何か足りないというふうに思います。

つまりそういうふうに考えて、インディペンダンスという言葉を使うと、「独」ですので、人から切り離されて一人になるという、そういう他から切り離された個人ですね、そういうニュアンスが強くなると思います。けれども本当に自立するためには一人きりではない。むしろ共同体、仲間とか、共同体以外の他者とか、そういう人との交わりの中ではじめて自分になれるということがあります。

自立という時にはそういう面も含めて考えていきたいと思っています。他者と、たまたまばったり会った、それで一時間たったらまた離れたという関係ならば、お互いの人格が深く交わるところまではいきません。そういう関

係からはなかなか人間らしさ、自分らしさというものは養われてこない。むしろ長い時間を共に過すといひましようか、分かち合うことを通じて自己形成がなされていく。そういうようなものとして自立を考えなければいけない。

ですから自立するためには家族というものが非常に大切です。家族という環境の中でお互いに相手を尊びながら、それぞれ世話をし合うという、そういうことが学ばれないとなかなか責任感も養われません。現在のアメリカの大都市の貧困地域のように、家族が崩壊しているようなところでは、本当に責任感ある個人というものできにくいことがあるようです。そういう具合に人と接し、相互依存をしながら、それぞれの人が自分で判断し、行為するということを学びとっていく、そういうふうにして道徳的な判断力や道徳的な行為力というものを養っていく。そういうことを自立というふうに考えたいと思います。

そうすると自立というのは何と違うかというと、たとえば権威主義というのと違う。権威主義というのは、自

分じゃない他者に判断を委ねるということになる。あるいは社会や集団で皆が良いと認めているものを無批判に受け入れていくということになる。自分自身の判断、吟味、反省、あるいは行為ということを経んじることになります。

民主主義というのは、民衆一人一人が主人だということとは、民衆一人一人が自立してほしいと、そういう願いが入っている。それは高い要求であって、そんな建前を言ってもなかなか現実にはそうはいかない。政治においては、欠点の多い人間の現実を冷静に見つめていかなければいけません。無理やり理想を唱えてもしょうがない面があるけれども、しかし建前や理想を無視してよいということにはならない。ですからたとえば教育という場面では、何とかそれぞれの子供の人が自立できるように、そういうことを目標にして努力をしているわけであります。

実際にはなかなか社会が複雑化してきて、自分なりの正確な判断を下すなどということは、とてもできない。たとえば学者でも専門のことについては何か言えるけれ

ども、専門以外のことはほとんど何も知らない。そうすると専門家の言うことに従わなければならないわけですから、相互依存の関係がありまして、簡単に全く依存しないで自立ということはできません。しかしどういう人なら信頼できるかというと、あるいはどういう集団ならば信頼できるか、ということについて判断力を増すことはできる。あるいは他者に依存しながらも自分なりの判断や要求をどうやって保っていくか、そういうことは大事にしたいと思っている。そういうところから、自立した個人々人を尊ぶような人と人との支え合いのあり方が形成されていきます。

民主主義社会はこの自立という建前を重視しているわけですが、宗教の中にもそういう要素があるということです。多くの宗教の中に、全ての人間に真理に目覚めてほしい、全ての人間が自分を正しく擱んでほしい、そういう願いがあると思います。とりわけ世俗的な価値、富であるとか、権力であるとか、名誉であるとか、そういうものを超えた道徳的価値、あるいは人間としての大事なものにそれぞれの人が目覚めるべきであるということ

を宗教は教える場合が多い。「それぞれの人が」というところ、つまり個々人が、たとえば神様にとって非常に大事だ、個々人の大事さ、大事さということは責任も伴ってくるということで、それぞれの人たちに要は救われて欲しいということの中に、自立してほしいということも入っていると思います。

全ての人の平等ということは、多くの宗教で教えられていることです。また全ての人に慈悲の気持ちで接する。あるいは愛、人を愛しなさい、思いやりなさいという教えの中にも、どんな人もかけがえない価値を持っているということが含まれています。その中にはすべての人ができるならば、その可能性をもっと發揮してほしい。そしてその可能性の中に自立ということも入っているということがあると思います。

そういうことで自立ということの中に、宗教と民主主義のある接点があります。そして、特に近代の宗教の中にそういう自立を重んじる傾向が顕著に見られます。日本の新宗教の中にはそういう意味での特に一般民衆、庶民大衆がそれぞれ自立すべきである、そういうことを強

く主張しているグループがあります。とりわけそれは法華系、日蓮系の新宗教に多いのです。

霊友会という団体がございますが、ほぼ創価学会と同じ頃にできた団体で、久保角太郎という人が始めた団体です。そこから分かれた団体に立正佼成会とか、妙智会とか、たくさん霊友会系の教団というのがありまして、霊友会系の教団を全部合わせると創価学会には及ばないにしても、相当大きな勢力を持っています。この霊友会では一番大事な思想は、在家主義ということですが、在家主義というのは出家、すなわちお坊さんに宗教的な活動を任せてしまおうのではなくて、在家自身が宗教活動をしようということです。

その場合に霊友会系の教団では、先祖供養が一番大事な信仰活動だと考えて、一人一人全ての信徒が自分で先祖供養をやる。そういうことを主張いたします。在家主義ということは、まず在家による先祖供養です。もう一つは指導きというのが大事である。これは自分だけが救われればいいというのではなくて、世の悩んでいる人たちみんな、悩み苦しむ衆生全てに働きかけていく必要が

ある。自分の喜びを分かち合おう、あるいは全ての人の苦しみや悩みに対して慈悲を持とう、そういう観点から指導きが要請される。

この指導きというのは、自分が教義をよく勉強して、知識を深めて、それで人に教えてあげると、そういうものではない。信仰をもつたら、その時からもう指導きを始めるということで、自分が信仰を持つということと、人に働きかけるということが同時になっております。それによって信仰を深めることができる。人間としても成長することができる。人と出会うことで自分を高めていく、こういう考え方があります。

そして法座とか「つどい」という集まりがあるわけですが、これは家庭集会をいたします。五人でも十人でも二十人でもいいわけですが、車座をつくったりしまして、あるいはご仏壇を囲んで集まって、そこで信仰について語り合うわけですが、その主な内容は体験談です。体験というのは、その人が自分でわかっていることでありまして、人からは分からないけれども、その人は分かっていること。そしてその体験を話すのに難しい教義はいら

ない。難しい教義はつまらない、感動もない、その人の人生の中から出てきた切実な体験、それを語り合うということが重んじられております。在家主義という言葉の中にはそういうことが入っている。

それと結びついて、体験主義という考え方があります。つまり自分自身の体験によって信仰を持つ、また成長していくということが大切になる。人から教わる、書物から教わる、それも否定するわけではないけれども、二次的なことであって、体験の中から自分自身で学ぶということをもっと重んじるべきだということです。

霊友会という団体は今でも学術的なことはあまり勉強しないという言い方は失礼なんです、書物による学習はあまり重んじないのです。霊友会系の教団では（立正佼成会のようにかなり仏教をよく研究する教団もありますが）、お経はもちろん詠みますので、それぞれの人がそれなりに悟っている、それを先生が講義して教えるというようなことは必要がないという考え方です。それよりも一人一人が体験の中で学ぼうじゃないかということです。

そういう具合にそれぞれの人が自分で考え、自分で行

動し、自分を成長させていくということが重んじられております。一般的な生活の中でもそういうことが大切にされます。自分を低く見過ぎてはいけません。もちろん自分を高ぶってはいけません。高ぶってはいけなさと同時に、自分を低く見過ぎてもいけない。信仰を持つた人というのは、本当に仏さまにとっては大切な人間なんだ、そういう自覚をもって、それだけ重要な責任もある、そういう自覚をもって努力していかなくてはならない、そういうふうに出かれます。

さらに霊友会では、こういうふうな在家仏教が可能になったのは、これは新しい事なのだと思います。こういう時代だからこそ、こういう在家仏教が出てきたのだと。つまり今までの過去の時代では多くの人が文字が読めなかった。法華経を読むことができなかった。みんなが自立しようと思っても、社会がそれを許さなかった。そういう時代というのは、本当に法華経が生きる時代ではなかった。明治以後、文明が開けて、みな教育を受けるようになって、自分を磨くことができるようになった、こういう時代こそ本当の仏教が広がっていく時代なの

だ、そういうふう言うわけですね。

これは実は創価学会と非常に近い思想がたくさん入っているのです。同じように仏教、法華経、流れとしては日蓮の流れから出て来ているものですから、私のような宗教学の立場から見ると、大局的に見れば同じ流れだということになるわけです。

こういうふうな霊友会に自立を重んじる思想があるということですが、どこから出てきているかというところ、それはまず大乘仏教というもののの中にそれがある、菩薩の思想ですね。声聞縁覚というような選ばれた少数の人たちではなくて、みな救われる必要がある。みなに働きかけていくんだ、これは菩薩の思想だと思いますが、そういう思想、それはそれまでの仏教では薄かった。難しい修行をしなければいけない、出家をしなければいけない、これは誰にでもできることではない。そうではなくてみな実践できる、そしてみなに実践を求める仏教、そういう精神が大乘仏教の中にある。その大乘仏教の中でも、法華経に特にそれは強いといえます。

これを私は法華経に顕著にみられる宗教的な「大衆主

義」と言っております。デモクラシーと似ている、民主主義と似ているわけで、庶民大衆全ての人が参加すべき、あるいは参加できる、全ての人が宗教的真理を掴み得る、究極的な真理は万人に聞かれていて、誰にでも容易に接近できる、そういう考え方です。そういうものが民主主義社会の土台とつながっているところがある。民主主義社会と通じる自立思想の土台になっているところがあるということですね。

創価学会や霊友会というのは、そうした法華経、あるいは大乘仏教の中にある、そのような大衆主義の思想と、近代的な民主主義思想（これは西洋から日本が取りこんだ）とを合体させた運動なのです。西洋の民主主義の影響を受け、もともと法華経の中にあつた自立の方向性をもう一つ近代思想によって深めたというように見ることができそうです。

たとえば福沢諭吉のような人が唱えたことと、創価学会が唱えたことに通じる点がある。福沢諭吉の『学問のすすめ』は、「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という言葉から始まっておりまして、万人

はみな同じ位である。生まれながらに貴賤上下の別なく、

「万物の霊」——これは世界の存在の中で人間というのはその頂点に立つ立派な大事な責任がある存在なんだという意味で、これは儒教の言葉から来ておりますが——

「万物の霊」たる身と心との働きをもって、天地の間にある万のものの云々とあります。つまり、みな平等、そしてみな自立の責任を負っている。そういうことができた時にはじめて国も独立できる、これは当時のナショナリズムと結びついておりますが、そういうことを縷々述べているのが『学問のすすめ』です。この場合は学問を通しての「自立」を言っている。これを信仰を通して「信仰のすすめ」と言えば、霊友会や創価学会が言っていることに非常に近づいてきます。

『学問のすすめ』の中には、独立の気力なきものは、必ず人に依頼す、人に依存する。人に依頼するものは必ず人を恐れる。人を恐るるものは必ず人に諂うものなり。人に諂うようになると恥を知らなくなる。そういうのが今までの封建社会だった。そういう時代から我々は卒業しようではないか。それぞれの人が独立して、武士らし

言い方ですが、恥を知る、そういう人間になろうではないか、こういうことであります。

福沢諭吉は今言いましたように、武士の思想、儒教的な土台と西洋の近代思想を結びつけて、こういうナショナリズム的な独立の思想を説きました。同じ流れが法華経の中にあつた自立を重んじる思想と結びついて、靈友会や創価学会の思想を作った、そういうふうに私は理解しているわけです。

三、「自立」を抑制する要素

以上述べてきたように、新宗教の中には、特に法華系の流れには大変強い自立への志向性があります。しかしそれと同時に自立を抑制する要素もある。これは宗教そのものにそもそもそういう要素があるとも考えられるのですが、さしあたり新宗教を例にして考えていく必要があると思います。

自立を強く訴えているけれども、実際の活動を見ると、必ずしもそうなっていないことがあるのではなからうか。その中で一番大きな要因というのは、集団の勢

力の拡張維持ということが重要です。そこに力点がおかれるというところから来ているというふうに考えられます。これは先程申しましたように、現代の宗教というのは、いわば競争の中で、ちょうど会社と同じように、会社が利潤を拡大するために、他の、たとえば良い商品をつくる、良い国民生活を目指すということ以上に会社の利益ということを考えなければならぬ。それと似て宗教団体も本来の宗教的目標を追求するということと同時に、組織の利益ということに引っぱられるということがありと考えられます。

二番目に言えるのは、自立というのは、そつちの方向ばかり強調すると独立や自己主張に向かつていき、人々との関係を切り離す方へ向かうわけですが、宗教は人と人ともつなぐことを大事にするところがありまして、それは日本の宗教では和の重視ですね。人といふ関係を作っていく、情愛あふれる関係を作っていく、そういうことを目指すということがあります。

ですからたとえば人に対して自分を出し過ぎるということを抑制する。立正佼成会などでは「下がる心」と言

ったりいたしますが、自分を低くする、謙虚になるということですが、そのことの中に集団の調和を乱さないようにということも含まれる。そういうことが場合によっては自立に対する抑制要因として働く。創価学会でも、

たとえば「異体同心」というようなことが言われるとすると、個々人がたとえば集団の方針に疑問を持ったとしても、さしあたり一致団結してやっていこうという方が重視される。それは当然宗教行動にとつては必要な場合があるけれども、場合によってその自立に対する抑制として働くことがあり得るのではないかと思います。

三番目にあげられるのは、指導者崇拜と指導者への權威の集中ということです。指導者が尊ばれるのは宗教にとつてある意味で当然のことではありますが、過去の宗教では最も偉大な指導者は過去の人であつた。ところが指導者が現にいて指導しているという場合は、その指導者の偉大なモデルというものが少し意味がかわってくる。

たとえばキリスト教徒ならば、イエス・キリストとはどういう人であつたかということを、みんなあつちからもこつちからも議論して、ああだこうだと言っているわけ

ですが、イエス・キリストが生きているとそういうことはあまりできない。そういう意味でいわば対象化（客観化）できないといいますが、そういうことがある。

ところが日本の新宗教の特徴の一つは、次々と偉大な指導者が出てきて、指導者の個人指導体制、いわば全権体制というものがいままでも続いていくという傾向がある。これも場合によって自立抑制要因になるのではないか。

四番目にあげられるのは、さつきの体験主義との関係があるのですが、知的な反省や議論に対してそれをあまり重んじないという傾向がある。これはそれこそ明治維新の時には、衆智を集めるということが大事ななんだというところで、近代化を始めたわけですから。いろんな人がそれぞれの考えを出し合っていくべきだ、と。ところが体験主義的な考え方というと、そういう議論というのはあまり役立たない。理屈では分からない、また何が正しい知識かということの研究したり議論しだすと、生きた信仰生活から離れてしまうことで、そういうものに重きをおかない。こんなことがあるように思います。

これらの要因が存在するのは、宗教であれば、避けがたいものなのかもしれません。宗教において、自立ということが絶対目標のように持ち出されても問題があるかもしれません。ですから宗教の立場として、自立というような目標は一部棚置きにして、他の目標を追求するということがあるのであろうと思います。しかし今私どもが直面しておりますように、宗教と民主主義社会の間の関係がギクシャクしているような状況では、両者が自立という点で共有するものがあるということを確認することに、大いに意義があると思います。

四、終わりに——宗教批判をめぐって

初めにも述べましたように、現在、宗教対民主主義社会ということが世界で問題になっている。その場合に宗教は危ないぞという人たちは、宗教が民主主義社会が尊んでいさざるまな価値、人権とか自由とかを、もしかして尊ばないのではないかとということを不安に思っている。

かつてカトリックが支配的だった西洋社会では、個人

の自立はおさえても、神のために個々人が犠牲になってもしかたがないという体制があった。そこからフランス革命が起こって、個々の国民がそれぞれに大事だという自由、人権、あるいは自立ということを勝ちとってきた。その成果が無になり元に戻ってはたまらない、そういうことがあるのではないかと思います。

宗教批判をする時に、マスコミの側では、たくさん誤解している、誹謗中傷があると思います。しかしその中にもし真実といいますか、十分宗教の側でも検討し、正面から受け止める必要があるものとすると、その宗教が自立ということをどういうふうに受け止めているか、そういう問題を聞きたいということが含まれている。

もちろん自立が全ての価値ではないのであって、もっと大事なものがある、それを大事にするために、さしあたり自立ということは棚上げする場合もある、こういう答え方もあります。それから宗教を正しく受け止めていけば、必ず自立という価値に通じるはずだ、そういう受け止め方もあると思います。そういうことがこれらの日本では議論されていかなければならないのではな

かろうか、と考えます。これは今私が自分の学問的課題として考えていることでありますが、皆様にも何かご参考になることがあったら幸いです。

(しまぞのすすむ・東京大学教授)

(本稿は一九九四年十月二十二日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです)